

出やむ其谷の公

地唄 万歳獅子 ばんせいじし

出雲 蓉

唄・三絃 川瀬 露秋

お笛のはなし

一噌 庸二

(能楽一噌流笛方十四世宗家)

地唄 万歳獅子

作詞・作曲者不詳。一七八九年(寛政元年)以降に作られたとみられ、一八〇一年(享和元年)の歌本に収録されている。八千代獅子という曲の打ち合わせになっている(手事で、合わせて演奏できる部分があること)。住吉の松が縁起のよいことにたとえて、君が代の万歳を願ったもの。住吉の松は、第十一代崇神天皇が、夢で住吉の海辺に天の光射す様を見、使者を遣わしたところ、一晚のうちに松が三本生えた。これが住吉大神降臨の松とされ、ご神木となった由来。直接に獅子を歌ったものではない。「万歳」は「千秋万歳」の「万歳」で、長い年月、万年変わらぬ御代の繁栄を寿ぐご祝儀曲。

地唄 万歳獅子 詞章

へ君が代の久しかるべきためしには かねてぞ植ゑし住吉の【手事】 松の二葉はあやかりものよ 青葉はまして 落葉さへ 妹背変はらぬ契とは 嬉しからうであるまいか【手事】
へ松の齡を重ねかさぬる 松の齡を重ねかさぬる

地唄 鉄輪 かなわ

出雲 蓉

唄・三絃 川瀬 露秋

地唄 鉄輪

能の「鉄輪」をもとに地唄にうつした曲。

都に住む女が、夫に裏切られた怨みと嫉妬の一念から、山城国(京都南部)の貴船神社へ丑の刻参りをする。夢現の内に、怨みに思う夫と、その新妻(後妻)の枕辺に迫り、二人の命を取ろうと女の髪をつかんで打ちつける。だが、陰陽師の祈りや祀られた神々に調伏され、今はこれまで…と退散してゆく。

前半は捨てられた女の嘆き、後半は能がかりで後妻打ちを表現する。

地唄舞では、凄まじい情念を写実的でなく、極限まで感情を抑えながら、鬼と化した女の哀しさを描出する。

〔注〕丑の刻参り 丑の刻は

午前二時。五徳(火鉢の中

に置く、鉄でできた三本足

の道具(鉄輪)を頭上に逆

さに乗せ、誰にも見られぬ

よう、人形を木に打ちつけ、

呪い殺す願をかける。



五徳(鉄輪)

地唄 鉄輪 詞章

へ忘らるる 身はいつしかに浮き草の 根から思いの無いならほんに 誰を恨みんうら菊の 霜にうつろう枯野の原に 散りも果てなで今は世に ありてぞ辛き我が夫の 悪しかれと 思わぬ山の峰にだに人の嘆きは生うなるに いわんや年月 思いに沈む恨みの数 積りて執心の鬼となるも理や いでいで恨みをなさんと 答振り上げ後妻の 髪を手に絡巻いて 打つや宇津の山の 夢現とも別かざる浮世に因果は巡り合いたり 今更さこそ悔しかるらめさて懲りや思い知れ ことさら恨めしき 徒し男を取って行かんと 臥したる枕に立ち寄り見れば 恐ろしや御幣に三十番神ましまして 魍魎鬼神は穢らわしや 出よ出よと責め給うぞや 腹立ちや思う夫をば 取らで剩さえ神々の責めを蒙る悪鬼の神通 通力自在の勢い絶えて 力も弱々と 足弱車の巡り合うべき 時節を待つべしや 先ずこの度は帰るべしと言う声ばかりは定かに聞こえ 言う声ばかり聞こえて 姿は目に見えぬ鬼とぞなりけり